

雑感・青海洞窟群調査によせて

角 野 二 郎

楽しかった休暇も終り、懐かしい探検部のドアを開けると、真黒に日焼けした顔が、みんなの帰りを待っている。ここで先ず聞かされるのは、合宿の大ボラ話。タコに吸付かれて死ぬような目にあつたドジな男が、今度は、目にも止まらぬスピードで泳ぐイカを、見事水中銃で射止めた話（石垣・鳩間島海底調査昭和43年3月）（もつともこの時私は石垣・西表島洞窟調査で、彼等と住居を共にし、彼の突いたイカの刺身を御相伴にあずかつていたので、まんざらホラでもないらしいが）沢登り中、滝を乗越した途端、熊とニラメツコをし、次の瞬間には熊も人間もお互いに反対方向へすつ飛んで逃げていたという（探検部某OBの大ボラ話）。山で岩ナダレに合い、気が付くと、人間には到底歩けそうもないところに、自分の足跡が残っていた（と某現役部員が真顔で言つた）。青海千里洞で洞内キャンプ中、集中豪雨に会い、アタック隊が洞内に閉込められた時、時のリーダーは、記録ノートに自分の懺悔録を克明に書記したという（が、この懺悔録は遂に公開されることなく、闇に葬られた）。

彼等は自分の体験談を時には真顔で、時には誇らしげにさえ話す。私はそんな話を聞くのが楽しくてならない。というのは、探検部のホラ話は死に直面した時のものが圧倒的に多く、彼等が死という危険をいかに克服したか、そこところが大変面白いのである。私は以前より、死に直面した時の人間の心理状態について非常に興味を持っている。死に直面した時、人はいつたい何を考え、その結果いかなる行動をとるのか……………。

彼に、その時何を考えたか聞いてみた。彼はタコの吸盤に足を取られた時、とにかく肉体だけは必死で吸盤から逃がれようとしていた。しかし、その時何を考えたかはどうしても思い出してくれない。心ならずも未踏のルートに足跡を刻みつけた山男にしても同様である。それは、私達が一週間前に見た夢の内容を思い出す以上に困難なものであるのだ。しかし、えてして非常に印象的なものもある。これは私自身のごくささいな体験談になるのだが。西表島のある洞窟を調査していた時のことである。洞内には深いプールが沢山あつて、それらをトラバースで通過するのだが、あるプールのところで思わぬドジを踏んだのである。先にトラバースをしている二人の仲間について、私も壁を登り始めた。高さ2m程のところで、私は石筍に手を掛けた。（洞内クライミングでは鐘乳石を手掛かり、足掛かりにはいけない、というケイビングの鉄則がある）石筍は岩盤から根こそぎはずれ、私は石筍を抱いたまま空中に投げ出されたのである。空中に居る時間はおそらく0.5秒もなかつたろうが、私はその時何を考えたか、今でもはつきり思い出すことが出来る。先ず、二人の仲間があつけにとられたような顔をして、落ちて行く私を見ていた。そして、自分は何処へ落ちて行くのか、下は岩だろうか、それともプールだろうか。どつちだろうか？岩盤だったら、死ぬかも知れない。と、同時に、私は私にとつて非常に重要な人物の顔が脳裏をかすめたような気がする。そして、死にたくないと思つた。どうしたらいいのだろうと思つた。次の瞬間、洞窟中に響

きわたる物凄い水音を聞き、全身に冷たいものを
感じ、歓声を上げてはやし立てる仲間達の笑い声
を聞き、自分は助かったのだと思つたのである。
それ以来、私は何か死ぬような目に会つたら、そ
の時考えた事を必ず忘れないうちに記録しておこ
うと思つているのだが、命にかかわるようなアク
シデントなどそう度々起るものではないし、起つ
ては困るものなのだ。

私は一度冒険をやつて見たいと思つている。命
を賭けた仕事、死に直面したときの強烈な緊張感
そういうものにいつも憧れているのである。けれ
ども、現実にはさにあらず、やはり生命は惜しいし
それに責任も有る。私は昭和44年夏の青海洞窟
群調査に於いて、C.L. を務めた。リーダーた
るもの、隊全体のあらゆる事象に気を配り、隊が
安全確実に目的を達成することに絶対的な責任を
持ち、又責任を遂行
する為のあらゆる努
力を怠つてはなら
ない。リーダーがやれ
冒険だの、やれ命を
賭けてだのと思える
のはタブー、いや、
それ以上に避けねば
ならない事なのであ
る。実際、私は隊の
安全の為にただでさ
え細い神経をすり減
らした。しかし、や
はり心の奥底のどこ
かに、冒険に対する
何かマゾヒズムな期

待を持つていたことはまつたくないとはいえなかつた。

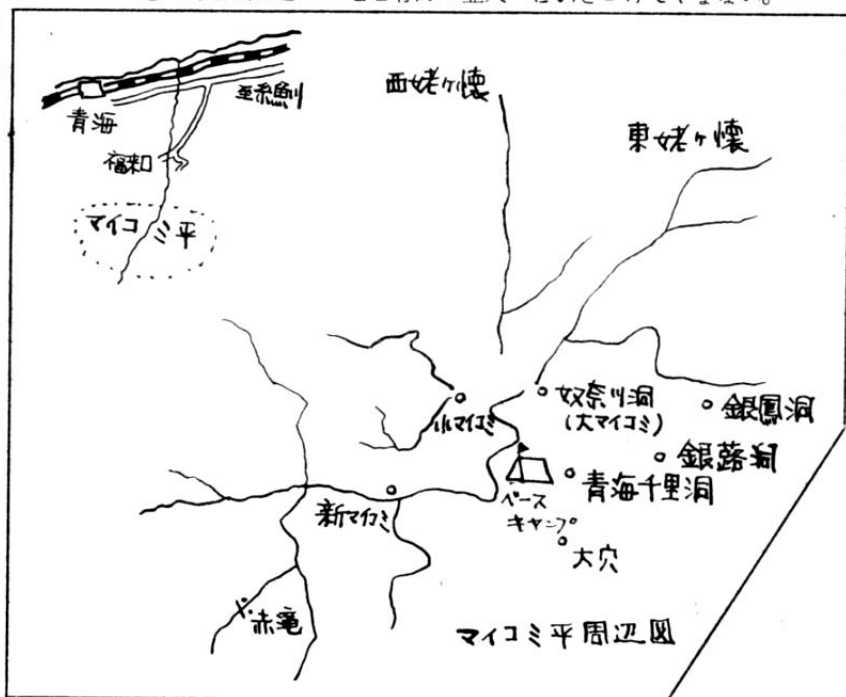
私は先日の青海洞窟群調査合宿で、今までにな

かつたような面白い経験(面白いなどと言うと怒
る人もいるけれど)をした。それは、「死ぬよう
な」とまではいかなくて、とにかく生命だけは助
かるという余裕は十分にあつたので、自然の猛威
というものをあたかもテレビか映画で見るように
ごく客観的に見る事が出来たし、あとで、自分自
身の心理状態や隊員の行動もよく思い出すことが
出来た。それでは、これより私達の貴重な経験談
(ホラではありません)を披露するが、その前に
計画の概要を少し述べておくことにする。

青海洞窟群調査計画書より

日程；昭和44年8月1日～11日

趣旨；未知への憧憬と暗黒への好奇心は、いか
なる事態にあつても変わることなく、今も私達の
心を青海の堅穴へと引きつけてやまない。



3年間の苦悩と、数多くのエピソードを残し、
昨年ようやくその調査を終えた青海千里洞も、今
は既知の洞窟として、マイコミ平の片隅に静かに

眠っている。しかし、マイコミ平の地下の様子は依然謎に包まれ、「幻の大横穴」の存在も推定の領域を脱し得ない。

今回、私達はマイコミ平に散在する堅穴のうち幻の大横穴へのルートとして、最も大きな可能性を持つと考えられる「奴奈川洞」と、昨年発見した「銀鳳洞」を選び、調査することにした。

目的；「幻の大横穴」に至るルートを開拓する。

方法；奴奈川洞調査を優先的に行なうが、降雨による増水その他の条件で調査不可能と見た場合、即時銀鳳洞調査に切換える。調査は主に洞内測量、写真撮影をもつて行なう。又、今回はアタック・キャンプを設けず、毎日日帰り行動をとる。

幻の大横穴；新潟県西南、北アルプスの最北端に聳える黒姫山は全山石灰岩層より成り、いたるところ著しいカルスト地形の様相を呈している。この山の東側を日本海に流れ込んでいる田海川（とうみがわ）の源流地帯に開けた小さな窪地はマイコミ平と呼ばれ、想像を絶する規模の堅穴やマイコミ（沢水が洞窟に流れ込んでいる所）が前人未踏のまま数多く残っている。

マイコミ平に降った雨は田海川を流れず、大半が大マイコミ（奴奈川洞）や新マイコミより地下に滲り、そして、地下水流の行方は……マイコミ平より田海川を北へ下ること約4kmには、福来ケ口（ふくがぐち）という鐘乳洞が有り、膨大な水量を吐き出している。附近に出水口の見当らないことから、マイコミ平の降水は約4kmの地下水路を通り、福来ケ口に至るものと考えられる。この地下水路は、その水量から察して、かなりの規模のものと考えられるが、現在のところあくまで推定にすぎないので、私達はこの地下水路を「幻の大横穴」と呼んでいるのである。

奴奈川洞（めながわどう）；マイコミ平の本流沢の流れ込んでいる洞窟で、渇水期には水は溜れ

るが、ひとたび大雨になると、10m程の川幅いづばいにあふれた濁流が轟音と共にこの洞窟に吸込まれる。水量の大きさから、幻の大横穴へのルートとして非常に有望であるが、それだけに危険な洞窟ともいえる。昭和42年に名古屋大学山岳部が、200mの下降に成功している。

銀鳳洞；昨年、青海千里洞調査終了後、附近偵察の際発見した洞窟で、大マイコミの北東1km附近の山腹のブツシュの中に在り、大きなホール天井が3箇所わたつて大きく崩壊し、残った部分が岩のアーチのように見える。このホールより堅穴となるが、浮石が非常に多く、常に落石の危険に悩まされる。昨年、我が部が50m試降したが、堅穴はなおも続き、底部に雪のような白いものが認められた。

— 計画概要以上 —

北陸地方、集中豪雨の恐れ……。出発前から縁起でもないが、実際今年の気候不順はいつたいどうしたことだろう。8月というのに北陸から東北にかけて、まだ梅雨前線が大きな顔をしていすわっている。時たま、夜行列車の窓を打つ俄雨に、心はますます憂鬱になってくる。それでも、私達がマイコミ平にベース・キャンプを設けた8月2日はなんとなく晴れて、大マイコミの水量を見る間に減つて行くようであつた。翌3日もますますのお天気。この日は銀鳳洞偵察。銀鳳洞は以外と水量が多く、又この辺の沢は伏流を知らないので、減水にはかなり時間がかかりそうである。ベース・キャンプに戻ると、大マイコミの水流は昨日、今日の好天で完全に涸れていた。銀鳳洞調査は始めから気が進まなかつたので、一同、この好運を大変に喜んだ。8月4日もまた抜けるような青空。早速、奴奈川洞に梯子のフィックスを開始する。内部は狭く、曲りくねつていて、傾斜も緩い。10～20mおきに馬鹿でかいテラスがあ

る。高度感が無いので気分は楽だが、その反面、梯子を使うかそれともアブザイレンで降りるか迷う位中途半端で、又ザイルの通りが悪く、40 m おきに中継点を設けねばならなかつた。気温は

12℃前後で、青海千里洞の2.5℃に比べると格段に温かい。男性的な千里洞に対し、女性的な奴奈川洞といおうか。50 m (梯子の長さで) 附近で、何処からとなく地下水が湧き出し、80 m 以下ではシャワークライミングを余儀無くされる。

ふと、洞口の方で激しい怒号が聞こえる。「また例のやつが始まった」装備類の降下作業が手間取っているのである。「荷物はまだか。いつたい上に居る奴は何をしてやる。」「荷物が着いた頃なのに、なんの応答もない。いつたい下の奴は……」「クソツタレ!」「アホンダラ!」みんな自分一人がえらい目をしてしていると錯覚しているのである。お互いに相手の様子が見えないので、余計頭にくるのであろう。しかし、この両者がいざ顔をつき合わせると、二人ともケロリとしているから他愛ない。

さて、洞窟は115 mのテラスまではチムニーとテラスの連続で、115 m地点より一気に切れ落ちている。石を落すと、2~3秒でドーンと鈍い音かはね返ってくる。下はホールになつていらしい。「今日はこれまで」80 m地点に大量の梯子とザイルをデポし、一同洞外へ引上げる。

その夜、雨が降つた。涸沢はたちまち濁流にあふれ、轟音と共に奴奈川洞へ吸込まれて行く。それからというもの、毎日のように雨が降り、奴奈川洞の水量は一向に減るきざしを見せなかつた。私達は水が完全に引くまでただひたすらに禅の境地で待たなければならなかつた。一度、しびれを切らして、水が引かないうちに入洞してみたが、洞内は猛烈な水しぶきで、強力ライトを照らしても厚い水しぶきのカーテンに遮られ、視界は全く

聞かない。又水音がやかましく、トランシーバーの交信さえ満足に出来ない。こぶし大の石が落ちて来ても、足元で炸裂するまで気が着かないのだから、全くお話にならないのである。

その夜、また雨が降り、沢は増水する一方であつた。しかし、もう誰も雨を気にする者はいない。雨と濁流だけがマイコミ平の現実であるかのようになり込んでしまつていのである。私はここで重大なミスを犯した。危険という事象に慣れてしまつた時の心理状態ほど危険なものはない。私はその時、隊全体の心理状態がどのように変化していたか、全く気が付かなかつたのである。余談になるが、飛んでいる飛行機から突落とされると、大抵の人間は身体が地面に叩きつけられる以前に恐怖と緊張の為、失神状態に隔ると言われている。しかし、その反面、例えば、地球上の放射エネルギーが年々増えていることに関心を持つている人間は非常に少ないと言えるであろう。今年の春、我が関西大学に初めて機動隊が導入された時、多勢の学生がこれに反対し、排除運動を行なつた。しかし機動隊が学内駐留を始めてから1カ月以上になる今日、もう誰も彼等には見向きもしない。私はこの人間の心理の移動が、時には非常に危険なものであるという事を、あのマイコミ平で身をもつて感じたのである。私達は最初、テントの漏水にさえ気を配り、やたらと新聞紙を貼り、溝は出来る限り深く掘つた。けれど、2~3日雨が続くと、もうシユラフが漏れることなどおかまいなしで、みんなあきらめきつて寝ているのである。又私達は日本の遙か南方、赤道附近に発生した台風には非常に気を配つたけれど、合宿前より北陸から東北にかけて停滞する梅雨前線には案外無頓着であつた。あの時点で、第三者がひよつこりマイコミ平に現われたら、彼は洪水の危険性を感じたかも知れない。だが、その時私達は洪水の危険に対する

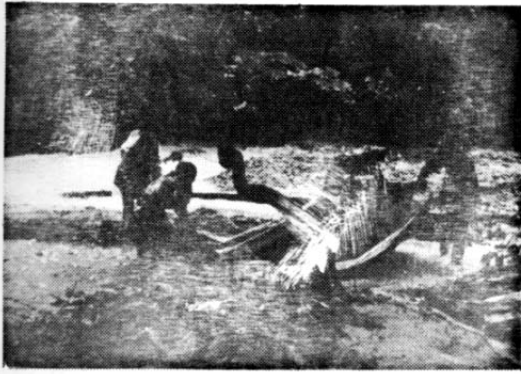
感覚が麻痺していた、いや、麻痺していることに全く気付かなかつたといえるだろう。

8月9日の夜、残り日数はあと2日。今、私達のすべきことはただ一つ、洞内に残した大量の装備類を撤収することである。けれど、明日また雨が降れば、それすらも出来ずにマイコミ平を去らねばならない。沢水は幾分減つて、この調子だと明日は装備を撤収出来ないことはない。私は明日の好天を祈り、シユラフに潜り込んだ。目が冁えて眠れない。遠くで、何か木の葉のざわめくような音がして、段々近づいて来るようだ。胸騒ぎがした。突然、突風がテントを煽り、続いて激しい雨がテントを叩いた。狂つたような降り方である。岩石が河床を流される時に発するググググという悲鳴のような音が地面を伝わって来るので、テントに居ても沢の異常な増水を知る事が出来る。なのに、みんな気にもかけず悠々と寝ている。岩石が河床を流れる音を聞くのはその時に始まつたことではなく、何度も聞いている。実際、異常ではあるのだが、異状を異状と感じとることが出来ない程、私達の感覚は麻痺していたのだろうか。明日は撤収をあきらめて下山せねばならないだろう。どうしようもない。また日を改めて撤収に來ればいい。どうにでもなれ！/そう思うと気が楽になつて急に眠くなつた。

8月10日午前2時、突然眠りから覚めた。全身がびしょ濡れだ。浸水したと思つた。それでも面倒臭くて起きる気がしない。エアマットの上に乗っている自分の身体がフワツと浮き上がった。みんな尻に火がついたように飛び起きた。あれよあれよと言う間に個人装備が流されて行く。外に飛び出すと、食糧テントも川の中だ。手当り次第装備や食糧を高い所へ運ぶが、大半が目前の濁流に呑み込まれていくのはどうしても手の下しようがない。寝耳に水を注がれたので、なにがなんだ

か、夢を見ているようである。一担水が引いたのでホツとしていると、すぐに第2弾がやつて来た。暗くてよく分からないが、私達の居るB.C.は、本流と、本流より派生した支流とによつて囲まれた川中島になつてゐるのではないか。本流の幅は20m、支流の幅は5m位で、それでもどんどん川中島を被つてくる。このままでは私達の生命も危い。逃げよう！/貴重な装備を手当り次第ザックに詰め、いざ支流を徒渉する段になつてザイルが一本も無い。ザックの細引を幾重にもつなぎ合わせたものを命綱に使う。水はおヘソの当りまで、ともすれば流されそう。全員安全地帯へ避難したところで、さあ大変、借りもののトランシーバーを忘れて来た。相棒と二人で再び川中島へ戻る。夜が明け始め、辺りの様子がうつすらと見えてきた。直径80cmもある大木が根こそぎ、枝をききませながら流れて行く。トランシーバーを見つけた！/気が付くと、大きな濁水の塊が無気味な唸り声を上げて迫つて来る。丁度高波が海岸を襲うように。めばしい物を捜している相棒をせき立てて濁流を渡る。既に水は胸まで達し、足のふんばりがきかない。心細い命綱を頼りに必死でこらえる。地面から足が離れた。流される！/仲間の差出す腕にすがりついた。渡つた。直後に濁水塊が通過しベース・キャンプの川中島は完全に水没してしまつた。

洪水一過のベース・キャンプはテントを張つていた位置さえ分からない程変り果てていた。残つたのは、私達が運び出した僅かばかりの装備類と、木に巻きつけておいたテントやシユラフ、それに重いウインチや鉋ぐらいのものである。又、炊事用具と洞口附近及び洞内にデボしてあつた梯子とザイルは全滅状態であつた。(後に判明)。他に、登山靴や衣類、お金等個人装備の被害も夥しい。中に、個人装備をキスリングごと流したド



洪水のあと……。10日午前5時

ジな男も居たが、誰も笑うに笑えない有様であつた。

洪水前の河床は、今は砂礫の丘と化し、ブッシュのあつた処を濁水が大きな顔をして流れている。奴奈川洞は洞口の半分以上を土砂で塞がれ、濁水

が渦を巻いて吸い込まれて行く。河床から3～4m程の高さの河岸段丘の上には夥しい流木が打上げられている。後のマイコミ平偵察の際、流失したエアマットやポリタンクなどが沢山見つかったのはなんとこの段丘上であつたのだ。

泥にまみれた装備を拾い集め、水のしたたるキスリングをどつこいしよつと担ぎ、みんなは山を下り始めた。自然の猛威——マイコミ平の現実を目のあたりに見せつけられた敗北感は、誰も隠すことが出来ない程大きくて重いものであつた。けれど、同時に私はみんなの後姿に一種の戦慄さを感じるのである。見よ！右足にキヤラバンシューズ、左足に地下足袋を履いてヒヨツコラ、ヒヨツコラと山を下りて行く彼の、哀しくも勇ましい後姿を！！

（経済学部3回生）

《私は旅と探検家を憎む》と『悲しい熱帯』の著者は冒頭に書きつけている。

私もまったく同感である。まぼろしにとりつかれた少数の偉大な旅行者や探検家は例外としよう。マルコ・ポーロやコロンブス、ヘデインやスコットといった人々である。彼らにとつて旅や冒険は、未知なものへのいざないや《秘境》へのあこがれではなくて、ある白熱した確信をたしかめる手段にすぎなかつた。彼らの意識の画面には、すでになにかのまぼろしが映じていたのであつて、旅や冒険は、そのさだかならぬ像にかたちをあたえる結晶化作用であつたのだ。

いいかえれば、彼ら偉大な旅行者や探検家たちは、目にみえないものをみるために、未知の領域に出かけたのだ。しかし、われわれにとつて旅とは、冒険とはなんであるか？おそらくそれは目にみえるものをみるためにでかけることであろう。

北 沢 方 邦

一丸木船の旅一